

「_____」は、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編及び
中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編より引用

自らの道徳性によって、良心は、「私」に「おーい」などと声をかけたり、「〇〇をせよ」と「私」に「命じ」たりしますが、良心は、どんなときに呼びかけ、指令してくるのでしょうか。それは、「私」が「価値の場」に入ったときです。この価値の場は、私たちの日常生活の中で、道徳的判断や道徳的行為を求められる状況のことです。では、私たちは、価値の場で、どのようにしてよい行い（道徳的行為）をするのでしょうか。

まず、価値の場は、私たちの日常生活のいたるところにあり、その場は多様で、求められる道徳的判断や道徳的行為も多様です。しかも、価値の場の設定（文脈・背景）が少しでも変わると、道徳的判断や道徳的行為も変わるというところなのです。言うなれば、価値の場が演劇の舞台セットがあつて、その中にいる役者（私たち）が脚本（道徳的価値）に沿って動いていて（道徳的行為）、次の場面の舞台セットが変わると、役者の動きも変わるようなイメージです。

例えば、公園を散歩するとき、道徳性は公園が価値の場であることを察知し、良心が「おーい」と呼びかけます。さらに、散歩を続けると、良心は、「公共の場を大切にすべし」と「命じ」ているので、私たちは、ごみを捨てたり草花を折ったりしないようにするでしょう。すると、向こうから近所の人が歩いてこられたら価値の場が変わり、「おーい」、「あいさつをすべし」と声が聞こえ、「こんにちは」などと言います。また、その人が、病気が治って退院された人だと知っていたら、「おーい」、「思いやりの気持ちで接せよ」と聞こえ、「その後、お加減はどうですか。何かできることがあったら教えてください」というような話をすることになるでしょう。ところが、その人が、向こうで、急にうずくまってしまったら、「おーい」「生命を守るべし」と聞こえ、「たいへんだ」と急いでその人に駆け寄り、様子に応じて適切な行為を判断するでしょう。このように、価値の場の設定（文脈・背景）が変化すると、良心による指令が変わり、道徳的判断や道徳的行為も変わることになります。

その他にも、食卓も価値の場となり、良心は、「健康に配慮すべし」「残食するべからず」、会社という価値の場では、「最善を尽くすべし」「約束を守るべし」などと声をかけているのです。「いや、そんな声は、日常的に聞いていないな」「いちいち声を聞いて判断していないな」などと思われるでしょう。この声は、価値の場による必要性や重大性によって、声の大きさが変わります。よい行いを当たり前のように行っていれば、良心からの声はほとんど聞こえないくらい声でしょう。つまり、良心が「おーい」と呼びかけるだけで、義務が遂行できているのです。ところが、「自分を律することができず、ついつい怠けてしまうこともある。してはいけないことと知りつつ意地悪なことをしてしまうこともある」ようなことがあり、自らの弱さゆえに迷ったり、道徳的行為をしなかったりすると、その声は大きく、厳しいものになってきます。このように、価値の場は変化し得るものなので、道徳性、良心のはたらきは、より高く、より豊かなものにしていかなければならないのです。

では、良心は、どうして、価値の場において道徳的判断や道徳的行為が求められていることが分かるのでしょうか。

前述の公園の例でいうと、「私」は、良心からの声を守って、ごみを捨てたり草花を折ったりしないように歩いています。そこに紙くずが落ちているのを見ると、真っ先に、良心が「おーい」と呼びかけることができるのは、その紙くずそのものに、道の石や土とは異なり道徳的判断や道徳的行為を求める何かはたらいていると考えます。知覚を通して認識でき、道徳的判断や道徳的行為を引き起こすサインのようなもの。それを「価値の灯り」と名付けました。公園という価値の場に落ちていた紙くずに価値

の灯りが灯っていて、その灯りを見つけた良心が、「おーい」と呼びかけ、それを聞いた「私」は、紙くずに意識を向けてハッとし（道徳的志向性）、それに呼応した道徳的価値が立ち上がってきて、紙くずを拾うという道徳的行為につながるのです。この価値の灯りはたくさんあり、紙くずには「公德心」、花や草木には「自然愛護」、遊具には「安全」という価値の灯りが灯っているのです。

では、街の雑踏の中はどうでしょう。街の雑踏も価値の場です。行き交う人々一人一人には、例えば、「人権の尊重」という価値の灯りが灯っていて、それは、大人でも幼子でも赤ちゃんにも灯っています。だから、良心は、雑踏の中で、その灯りを見つけては「おーい」と声をかけ続けています。もしも、誰かとぶつかってしまったら、良心は、「謝罪せよ」と「命じ」ますし、周りの人たちを不快にさせないよう「迷惑な行動や言動は慎め」と「命じ」ているのです。また、お店に入っても、店員さんにも価値の灯りが灯っているので、商品を受け取ったら「感謝の気持ちを表せ」と「命じ」ます。

同様に、身の周りにあるモノやコトにも価値の灯りが灯っています。食卓に並ぶ焼き魚やトマト、お茶に至るまで、「感謝」の価値の灯りが灯っていて、生産者や流通業者、小売業に関わる人々、そして、何より、魚やトマト、お茶の命に感謝して「いただきます」と言っていますし、それらを食べて、健康に生きていることにも価値の灯りが灯っているので、健康の維持、増進に努めようとしています。

このように、価値の灯りという考え方を取り入れることで、良心が価値の灯りを発見⇒「おーい」と呼びかけ⇒「私」がハッとして気づく⇒良心からの指令⇒道徳的価値が立ち上がり、道徳的行為を行うという、道徳的行為の出発点が具体化され、道徳性によって「道徳的行為を可能にする」プロセスが明確になります。良心は、道徳性の実践的部分なのです。また、どのような人、どのようなモノ、どのようなコトに灯る同じ価値の灯りは、全てに等しく、同じようにリスペクトされなければならないと考えることができます。店員さんとは違って、自動販売機でジュースを買ったときに、「ありがとう」と言わないまでも、手荒く扱ったり、機械を壊さないようにしたりするのは、最低限の礼儀でしょう。これらのことを通して、「人間性をより高めようと努力する」ことができるのではないのでしょうか。

では、人やモノ、コトに灯る価値の灯りには、どのような特長があるのでしょうか。

まず、価値の灯りが表すのは道徳的価値であって、しかも、内容項目の「手掛かりとなる」言葉や、標語のような言葉のようなもので、公園の草花には「自然愛護」や「自然を大切に」、公園に落ちている紙くずには「公德心」「ゴミを拾う」などというような大まかなものであると考えています。これらは、言わば「人間としての誇りや人間愛」をもって「崇高な人生」を造り上げる一つ一つの「骨組み」（だけ）であって、何ら意味を有していないものなのです。しかし、それで十分であって、価値の灯りを見つけた良心が、どんなことが求められているのかをおおよそ把握することができ、大抵の場合、そのことだけで直観的に判断して行動に移すことができますが、良心からの指令と自分の欲や都合が対立するような葛藤が起こったり、モラルジレンマのように同等の複数の道徳的価値が立ち上がってきたりした場合など、骨組みだけでは決められないときも出てきます。そのようなときには、道徳性によって立ち上がってきた価値のネットワークを考慮に入れた意味付けが重要になります。この意味付けとは、価値の灯りによって求められている道徳的判断や道徳的行為と価値の場の状況とを詳しく検討し、判断して、自分の欲や都合を挫き、「人間としての誇りや人間愛」をもって「崇高な人生」に向かって最善と考えられる考え方や行為をことばとして表すことです。そうすることで、自らの考え方に「強さと気高さ」が生まれ、「人間としての誇りや人間性」をもって堂々と進んでいくことが可能になるのです。

次に、価値の灯りは、公園という価値の場の草花の灯りは「自然愛護」、公園という価値の場に落ちている紙くずは「公德心」が灯っているのですが、同じ草花でも、病室という価値の場に飾られる草花（花束）には「希望」「思いやり」という灯りを放ち、同じ紙くずでも、町内一斉清掃日という価値の場では、

「ボランティア」「郷土愛」という灯りが灯ることになります。つまり、同じ人やモノ、コトであっても、価値の場によって価値の灯りが示す道徳的価値（骨組み）が変わることになります。

また、人やモノ、コトに灯っている灯りは、一つとは限りません。例えば、高校球児には、「夢の実現」「努力」「友情」「愛校心」「郷土愛」「誠実」「一生懸命」などの様々な灯りが灯っていて、高校野球を見たたくさんの人々は、自分の道徳性と響き合った灯りに気づくと、感動し、拍手を送るのでしょう。

以上の２点において、価値の灯りが示す道徳的価値は、価値の場によって変わり、多様な価値を灯すことになるので、道徳科において、「多面的多角的に考え」る必要性があるのです。

ところで、私たちは、高齢者の方に席を譲る人を見て「親切な人だな」と思ったり、失敗しながらも諦めない人を見て「粘り強く努力する人だな」と思ったりすることがあります。これらのことは、それらの行為に見られる価値の灯り（道徳的価値の骨組み）と、その行為を見て「よい行為だ」と思う私たちの道徳性とが一致したときに想起されることとみなすことができます。つまり、このようなことを思うのは、私たちの道徳性に同じような骨組みができていると共に、「親切とはこういうものだ」「努力とはこういうものだ」という意味付けができていたからだと考えられます。だから、それらの行為を見逃さず、見つけることができたのです。このような場合のほか、町内一斉清掃で、初めはいいやや参加していると、落ちていた紙くずは単なるゴミで、何らの灯りも灯していないように見えていたのが、きれいになっていく町内を見るにつれて、だんだんと紙くずに灯る「ボランティア」という灯りが見えるようになって、「ボランティアも大事だな」と考えるようになったという場合は、自分の中にあった骨組みに道徳的価値の大切さが付与されたということもあるでしょう。このように、道徳的価値が「自分事として考えられる」、道徳的価値を「納得して捉えられる」というのは、価値の灯り（骨組み）に、しっかりと意味付けがなされることがとても重要になります。これも、道徳科の大切な役割です。

これまで、多くの人「一人一人を尊重する」という価値の灯りを見つけていた私たちですが、権利を著しく認められていなかったマイノリティの人たちの灯りは、十分に見えていなかったのが現状です。ところが、近年、多様性を認める社会（価値の場）に変化してくると、それが次第に見えるようになり、私たちも共に考え、本来のあるべき姿に向かって進んできています。今後も、同じように、企業倫理、動物倫理、AI 人工知能倫理など、まだ見えていない灯りを見つけていくことになるでしょう。つまり、価値の灯りは、まだまだ見えていない灯りがあり、私たちの良心によって発見されることを待っているかのようなのです。

このようなことから、道徳的価値（価値の灯り）は、私たちの意識の外側にもあり、私たちが見つけようと思っただけと関係なく、客観的に存在しているものであると考えられます。つまり、まだ見えていない灯りを見つけて、自分や他者、社会や自然を豊かにできる可能性に開かれているということになります。すると、道徳的価値は、自分の内面にあるだけのものではなく、自分の外側にまだまだたくさんあるという意識をもち、これからは、良心のはたらきをよりいっそう研ぎ澄ませ、謙虚で誠実な態度で価値の灯りを求め続けることができるということになります。そして、その先の、「誇りある生き方、夢や希望など喜びのある生き方につなげる」ことができるようになっていくことになるでしょう。

では、道徳的価値は、時代や国、文化などによって変わるのでしょくか。これに対しては、道徳的価値が、「人間としての誇りや人間愛」をもって「崇高な人生」を造り上げる骨組みであるということは、普遍的で、何ら変わらないと言えます。いつでもどこでも、それを造り上げている「生命の尊重」「平和」「全ての人の幸せ」「人間性」などの骨組みの大切さは何も変わっていませんし、これからは変わることではないでしょう。また、決して変えてはいけないことでもあるでしょう。時代や国、文化などによって変わるのは、道徳的価値ではなく価値の場（状況・文脈・背景）なのです。その場に灯る価値の灯り（道

徳的価値)は、普遍的な価値を灯し続けているのですが、価値の場が変わると、私たちは、価値の場の方に重きを置いてしまい、その骨組みに付与する解釈、意味付けを変えてしまうのです。価値の灯り(道徳的価値)を見つけ、その灯りが求める道徳的判断や道徳的行為を考え、それに意味づけ、実践しようとするのが本来の姿なのですが、価値の場が変わるごとに左右され、それに翻弄されて意味付けを変えてしまうのです。だから、せっかくよいことをしようと決めたのに、「大勢の人になって、恥ずかしいからやめておこう」ということになるのです。道徳的価値は、人の本来的なよさであって、如何なる状況にあっても変えてはならない大切な見方や考え方なのです。私たちは、変化する価値の場を基にして意味付けをするのではなく、道徳的価値を基にして意味付けをしなければならないのです。「生命の尊重」は、病院という価値の場においても「患者の生命を守る」という意味付けであり、価値の場が学校に変わっても「児童生徒の命を守る」ということなのです。たとえ、戦争をしている国々という価値の場においても「生命の尊重」は何ら変わらず、それを基に考えると、即時停戦しかありません。道徳的価値が普遍性をもつというのは、国境を越え、全ての人に当てはまるということです。「自国の人々の生命を守るために戦う」というような解釈は、詭弁に過ぎないのです。

だから、私たちは、児童生徒が、プリントを提出するときとに並ぶことと、バス停で並ぶこと、災害時に救援物資を受け取る時にも並ぶことができるように、その意味付けを考えることができるようにしなければなりませんこのとき、みんなが並ぶという、一つ一つの価値の場について学習しても、すべてを網羅することはできません。如何なる状況にあっても、常に、人としてのもつべき道徳的価値の見方や考え方、在るはずの姿を考えることができることがとても重要なことなのです。「道徳的価値とは、よりよく生きるために必要とされるものであり、人間としての在り方や生き方の礎となるものである。…児童生徒が今後、様々な問題場面に出会った際に、その状況に応じて自己の生き方を考え、主体的な判断に基づいて道徳的実践を行うには、道徳的価値の意義及び大切さの理解が必要である」この「道徳的価値の意義及び大切さの理解」のための問いが、「ある人」や一部の人たちがどんなことを考えたかという問いではなく、「私たちにとって」また「人として」という視点で考えなければならない問いであるという点で、「一つ上」の問いになります。児童生徒が、道徳教育と道徳科の学習を通して、このような「一つ上」の問いがあることを気づき、道徳上の問題場面に出会ったときに、このような問いで考え、判断し、答えをことばで表現することができるようになることが、道徳性や良心を鍛え、高めることにつながります。そして、このことが「人間は本来、よりよく生きようとする存在であり、そのために人間性をより高めようと努力するすばらしさをもっている」ことであることに気づき、その姿が「人間としての生きる喜びや人間の行為の美しさ」であり、「人間は強く、また、気高い存在」になっていくものであることを感じさせ、考えさせるところにも、道徳教育と道徳科の大切な役割があるのです。

私たちも含めて、普段から、自らの道徳性を研ぎ澄ませ、高める努力を怠らないで、価値の場で灯る価値の灯りをしっかりと見定めるようにし、そこで人間性に外れない、最善と思える行為を考え、判断し、行動を起こしていくことができるようにしていきたいものです。